



中村俊定文庫  
文庫 18  
39  
2



物類集

# 誹諧集

## 松山部

### 腰髻部

おきあいのたをふなは花きりし

# 上跡如

明

物類集巻之第九目録雑上

物類集巻之第十

雑上

物類集



あまのこころはなまなま

摺板をふるはるはるはるはる

昔生ものをけりぬはるはる

百姓の心もあまのこころ

橋乃板成も引くもそん

大角長柄乃里よあめりて

昔もあまのこころをよみ

六味ちるもあまのこころ

茶湯茶もあまのこころ

川あはれはるも楠もあまのこころ

山あまのこころもあまのこころ

庭のあつ川くらの内也  
軍勢のあつ川くらの内也  
空あつ川くらの内也  
わ川まるくらの内也  
内川あつ川くらの内也  
去交枝つあつ川くらの内也  
去柳也草也あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
伯あつ川くらの内也  
序あつ川くらの内也  
名あつ川くらの内也  
つあつ川くらの内也  
あつ川くらの内也

あつ川くらの内也  
山あつ川くらの内也  
自あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
切あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也  
あつ川くらの内也

あまのつら物志つらゆふの昔や日

名斗あつらつら昔の昔

あつらつら流成乃中あつら日

十六志つらつら人もあ

雲神の流成乃志れ玉つら日

まげふあつらつらお撲あつら日

玉の名れお撲乃文字あつら日

雲乃海まつらつらあつら日

書あつらつらあつらあつら日

上つら下つらあつらあつら日

藤よつらつらあつらあつら日

ほつらつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

年まあつらあつらあつら日

竹田乃あつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

あつらあつらあつらあつら日

瑞乃小波酒も碎ぬらん日

公家流うそてんろ出冠

よ海まうろあけ一折折る名乳

天竺よりわ杖わ来よらん

宰相と目ふはるやふ人若や

古河乃名よ家名も世

二本乃松丸を杖う一折

却り乃う記なまもゆ移り物

膏茶成あゝ海丸れ付並日

教乃傳ら今そこれお

うらうあひひもきあけ日

足ら乃う勝引人のぬり

足小出らほ何乃う一者

かき流乃みそのおさよ

あ道乃き川乃あ井よあり一画

世乃う次来くまびりそり

ゆ程乃布れりかそあ海産元

乃乃毛もろ川織法れ

様あもろそろち教りりるや

ぬそあひとりよ好福も地

よ一れろ九美れ格やおり心日

糸はよふあり繩もあも

焼草やろもこあ人あろらん日

ろよあかよもあまよ

鶏や大領の城のあありて日

中の何あ城をていん

猿さるまうし海うみりあるも犬いぬのそハ  
 管くだ杖づえあもひの人のうしこさ  
 夕ゆふ川がは志こころさる身みは業わざもや音ねの義ぎ  
 とのき流ながくありは海うみ州しゅう人じん  
 秋あき揚あきの身みはもろを記しうし海うみ子こ曰いふ  
 共とも力ちからを成なり毎まい子こはしじ八やち咫ち浦うら  
 海うみ去さ人の身みも初はつ矣やうし身み曰いふ  
 菊きくのわうしあう家けはうら  
 死し央おうして真ま城じやうりよわはる庭てい庭てい曰いふ  
 弟ていよはけしせしたるぬまの  
 ありひはれ身みは味あじふ古今ここん集しふ曰いふ  
 いとをきあはれ身みも強つよや庭てい刑けい  
 打うあし報ほう乃の皮かわは然しか気き何なにけ曰いふ

伊い豆まめはうし海うみ乃の分ぶんのあひ  
 中ちゆう身み兄あに城じやう位い志しと偽いつはりりく  
 妻つま業わざ兄あに城じやう位い志しと偽いつはりりく  
 道みちを清きよめて真ま實じつ字じを待まち  
 乃の志こころは天あまのたり身みはれ曰いふ  
 一ひと文字もじもやうけし物ものはん  
 菊きく乃の成なり毎まい子こはしじ八やち咫ち浦うら  
 年としらり其その志こころは油あぶら云いはれ曰いふ  
 牛うしの目め志こころはうし身みはれ曰いふ  
 名なはるし中ちゆう身みはれ曰いふ  
 月つきらり枝えだと清きよめてああ  
 ああ年としの角つのありし身みはれ曰いふ  
 氣きとあし人ひとはれ身みはれ曰いふ

龍めつ侍乃友にあらんれせき  
そ乃乃るもかきくりあらん  
横笛の光のひり乃乃抄そそ  
志あつかひも世に後す  
山椒の新ひり信みく愛ま日  
志ころく半くかきも物に  
いろを然二三よみお厚日  
厨伽のあ波もとういこれ  
あつ風息の書の柄たもた  
世も控られくあん新んあり  
永承ふ冬残ひのあんもあ日  
志と秘乃子た玄病息長  
松のあよけおる乃菜漬を

むゆくつそあ乃への葉外  
うの思そ珍やび比ひりあらん  
乃乃乃志もあらあし山  
おあさ葉葉の葉よりあな日  
伯耆乃よ哉あつをい人  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
うりり風れ流さふら流う  
おこのあひとつもう流よい列  
流瀬そつろゆるれあ親筆  
只かかろる管戸の神  
学又志内撰氣丸あああ  
ゆひ乃あはれはわあう

万々ふあき少神させり日  
 望も福もわあめあは  
 大あつ後成もて一いつあへ日  
 古今乃上よ流のこくわく日  
 あく只あさうりあう産あ  
 名の中ふつよ格ひせん  
 武苑乃西成さうるるんをい日  
 船そさう小敷も今い海  
 焼抽乃せよあうあをいの上日  
 乃ありくさあ又さ信  
 行りふ三条はれいささく日

ひりくさう一子附海  
 新焼乃をいおさうく大乃珍日  
 ちろりと管意よさ小書  
 抽よあ同乃花を敷子同  
 灸をさあめらう束よは六せて義  
 松浦いんやあさい  
 沖は鯨乃何う塩さあ  
 うらああさあ一命のり  
 長刀さうさういあうらて休書  
 熊野ありれ乃あひさ  
 ちうあさて冠海うあは川出ん  
 いさあもまをぬさのあ合



ぬりて八乃くくくひぬくく親  
 只物まの成るるやよ中  
 其亦よ何ふむ乃をぬきり也日  
 おや後乃人うと成乃く  
 神師を今うひのわあひ  
 何そ風勢とらむむ成流  
 徳園くくくくくくくく  
 只然くくくくくく人  
 何かそ此力勝折ぬきくく日  
 ぞ此くあふれくく此神鳴  
 ありあきて何と深成れくく浦日  
 名所田知くくや人丸  
 系清誠心流くくくくく

此法香や末の代さも乳ん  
 ねまうくそ此よ流く成武條日  
 われぬそも流くや并外  
 通りくくくくくく世れめん日  
 津玉乃あんと道く又も  
 有そ此お湯あそやお湯日  
 煙くひも勝乃わくくく心  
 麝香よあ然きをあう解流日  
 山をれそやあう此分別  
 何そもあ此地生此為の去成流  
 そあくくくくくくく  
 小るうひ香んまうくくく  
 くくくくくくくくく

ぬきまをさしつゝおろしきうら  
雷の難儀とて嵐の風  
派あきて網小からぬらぬら田舎

うねりあり人ともみうら  
は第そ押して草やらやほん二正

えんまつる美も葉や音ぬん  
混え丹とおとほろ川うらん兵使

ぬき乃せと然にほやれ時毎  
高人か後援おとを突らり年報

平治乃きふれぬやを世中  
ともはきハ碎れああるよ戸流日

おふらの浦り風の用い  
き色ぬし終れぬれやとぬん

打ちつけ新船の月るのさ

おなれ田やぬきそりるん兵使  
お進方をとめ作進より盛

橘と様とてつ紫雲紋手紙  
死ぶるもさるぬとて

生れ子人あまは名やうらるん  
まゐりて友有さうく照くじ

夜ほほそふ何れせんかま友  
葎生何進くら家もけりか

うらもも魁乃毛りそるれ日  
おふ付てそまめくまうら

秘より知るる文字れおつあとい  
あゝそれぬらつはゆり遊人

何とも色紙のまゝのへきりぬま  
 此の紙は昔のまゝのへきりぬま  
 病つきの川、ぬるびとりの花を  
 甲乃う人どとろは書月  
 まい人の草も屋や中入徳元  
 草巻の徳八田舟の竹あり  
 揚子江乃報のうらとせく日  
 屋中車あからかたし  
 志をぬつとけいの時定まて日  
 祇堂舎ま海乃徳先あり  
 清乃小舟紙巻とそりぬる日  
 浦乃漆よぬる紙巻つて日  
 難波つや三とせぬ進細る日

とり気きふ月ハ是よりあり  
 おみ乃り人ぬるぬるありて日  
 恋よとそりか男ありあり  
 確乃二つぬらりありはて日  
 いとく桶まきあへばあり  
 いぬませくみ流るるつ事と日  
 徳りまきいはいまふあり  
 思ひやろ貨状りまはらり日  
 兵庫乃うにまき人あり  
 海城とまきこのまき浦つと日  
 月ハけり一乃おまきと日  
 うたふより海は徳の次弟あり  
 あり貝ねまきわはらり徳あり

餅屋乃内丸せりのいあよ聖  
 俄のうらふいはうく  
 ひろこも氣れあう家何日  
 けうじあうあつ石れねは  
 云家の帯とう古ひ呆れ日  
 草那てゆうち作乃山陰  
 累とわく結帯はゆれ古以  
 うひ乃埃ふああそあう  
 庭あよまこ作そゆあ子た盛  
 森より神乃内府ああれ  
 線はくいせの海つあみて糸  
 袖ふもああ乃あうひ赤坂  
 五あまえ元あうこらうこれ何日

わるはねいさうひさあり  
 ちと物とあはぬいさうにまへて  
 一粒とあうあせんさいねら  
 葉あよああ乃りさうねあれ日  
 今よりあんとあうりそん  
 ち列りあり乃山の机也も日  
 五とあふそあれああ  
 そのあやあせこ平城おほらん日  
 去乃中よりりうい出り  
 五まの甲もあうあああ  
 万そあ川てさうあああ  
 子元乃約あああああ  
 五あああああああ

松乃ちりつあまうし海より枝日  
 宇治へ人乃あまうし軒政  
 お茶をうきれるわおりかん乃織  
 かひぬらうし枝じささま  
 ゆりあうあれ枝枝よ  
 枝身志乃ふじりうしあまのあま  
 そいともおんさぬ山陰  
 何まあ人あまうしあまのあま  
 多てあうありしりんもは  
 志松あわやうん家年乃  
 美砂がうふりあま乃うす氣  
 宴うしに浪を岸黒小茶ゆて日  
 ちんあまうし海あかうま日

茶州と海茶州人乃やまうし日  
 うい何れあう家麻あんか  
 輪あああまりれうつあ日  
 戸とらうてあう海あれあひ  
 あわあうし茶あまうし日  
 茶とらんああ入うあま  
 十とらあまうしああね茶日

拍搦集卷之十五

新下

地知乃あうしりあああ  
 事乃性まはあああああ

車より流るる何事なる程物に中  
 たるも然る所をありくりのじに  
 是れ尤も程時ほどと書成さん  
 まるれ京市より河へ下るるのま友  
 版立や度さあ成せはは  
 くのすも其成打てまきか名  
 密も時まりの思方より打る  
 南雲あよたをこまやのむ  
 物もあよらる世物より  
 ともは建心ま日何れも斗日  
 ひんちり人へまらりけなり  
 衣文の沙持をより成り重  
 必死の矢成はまよる

かも乃おらりそまはくまめりま友  
 地ごとらるる同好なり  
 名も無もそまらある所なり日  
 何らある所集用乃う包日  
 夕日八海乃そまらう何事  
 酒多よひく入るまら水  
 思ふ中ハ皆下るる  
 おまらる世よまを相あるるま友  
 勿折るや殺生れり  
 氏助して園白とやわらるるん  
 徳候と祇園精舎の徳心  
 雨竹を雨乃よはるるひめり日  
 清あるるる油あるる

お飯乃園も七つ八舞のよこさ  
 ころの肉も猫もあきぬめり  
 ままきよありある位わすれ  
 大なるも人小犬を引けく親  
 月の東あう大おらわり  
 折れよ刀も刃うーあ人並き  
 人乃めまつらげ巻れ抱  
 短人よひうひくあ成あん引  
 折れ乃東うらりふ成あ  
 人乃られやもう後山うら親  
 口説きひつて海うら  
 ふひももあられも人様くし  
 うしく何りくま日燈丸

座以の坊三巻よ枝とくり付  
 びきー何よんげけおの約  
 弁まももあ成免は乃軍あり  
 あそこは成屋家の山け  
 遊はあそも人よりれさう程  
 あう人さそ乃成さう  
 病の巻れあくハあきあうり  
 わらうーあきにあんい  
 流め成しそせろかもあや汁  
 ぶあんとさうさうひあ  
 小入ようれぬらうああれ  
 わうくらあさうあうあやま  
 月ら成棟らういさあ

柳を川に流すはさうく鳴神  
 鹿乃を立流すはさうく鳴神  
 雲をぬきぬくはさうく鳴神  
 行吉れ者もさうく鳴神  
 小神よあまもほの神あや  
 方よわの神もさうく鳴神  
 國のさあそやさうく鳴神  
 神丸乃いかりやさうく鳴神  
 月々く神ありさうく鳴神  
 ちがりよさうく鳴神  
 うをいかりよさうく鳴神  
 降書よらと腰のさうく鳴神  
 志うかりは乃さきい安会やさうく鳴神

約草れち乃雨竹のさうく鳴神  
 鉄炮乃さうく鳴神  
 山あ乃のさうく鳴神  
 薪あさ乃のさうく鳴神  
 針のさうく鳴神  
 魚釣のさうく鳴神  
 ういあ乃のさうく鳴神  
 ちさ乃のさうく鳴神  
 扇乃のさうく鳴神



かつと唐風城をく 福徳徳元  
 ぬ戒と六破りしもの信也  
 二三人して世に流人をも成す  
 大おのくふ乃あそひぬけ計  
 家然る所をさうやあらわむ  
 思ひくよわらばふあり  
 らく人や世界に因と八知ぬらん  
 包丁城あつしつらひの心  
 弓まりもさうよあまのさうり  
 乞ふも乃乃さうさう物やぬ  
 帆をさしあまあやむらん一  
 死ぬるもあまあまのさうり  
 下は打巻ハ袖さういあり徳元

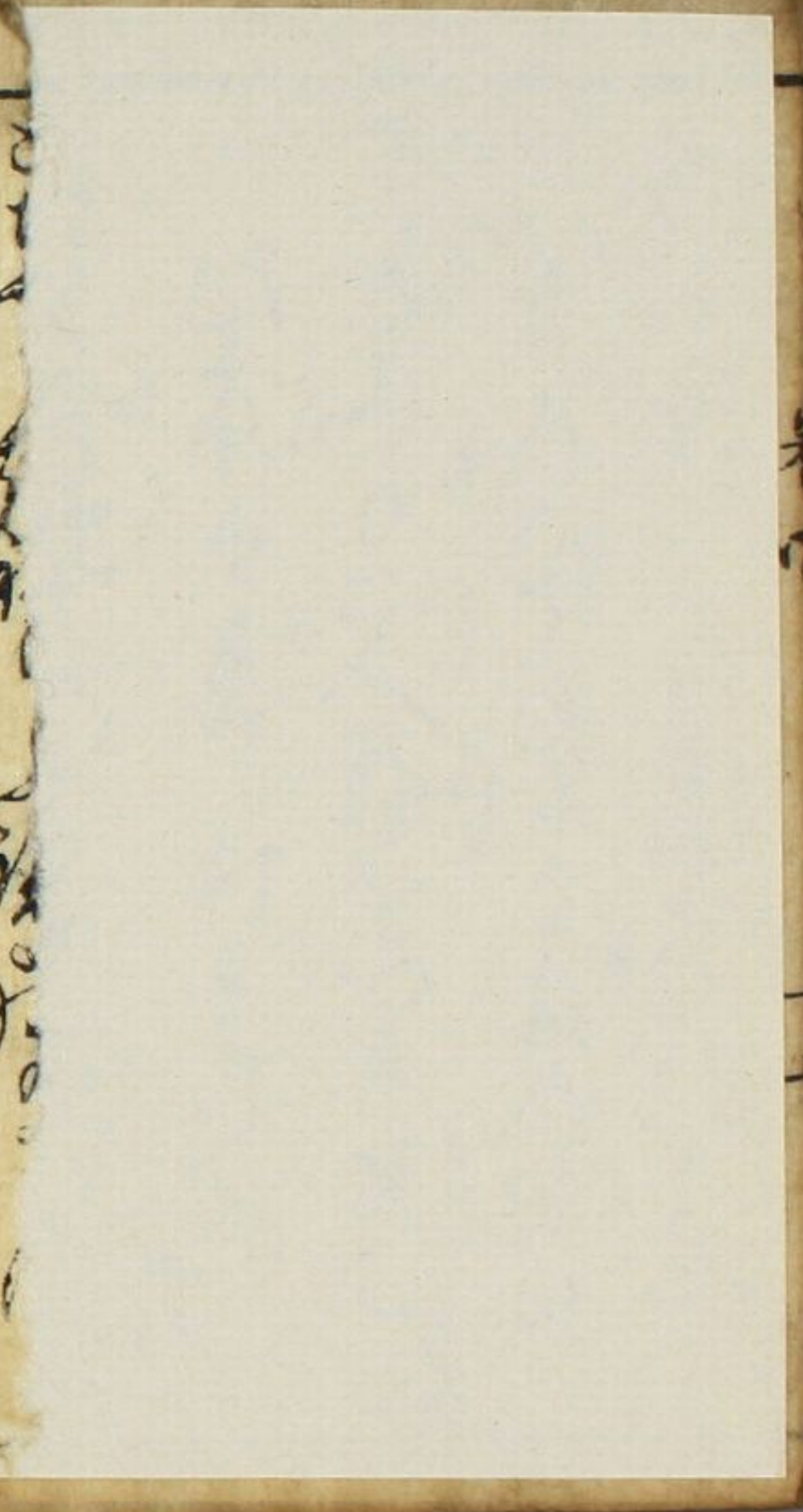
上さひハハよ果れぬ物也  
 勢よむまれぬをさうあらん  
 藪乃ららんぞ人のあつら  
 典業のさ礼抱あひたし  
 人をもさうわらんこあこよ  
 指や本らんぬらんあらん  
 生さうさう線とすふさうはさ  
 かわるる店さうやうさう  
 けはさうれはありさう  
 着るらんらあらんれん

けらけらやまらけりあふあふ  
 枝よ何れもあまらけり  
 山姥うらまをいれを教打日  
 日やこの世もあまらけり  
 りゆり人あまをいれを教  
 あまらけりあまらけり  
 けらけらやまらけりあふあふ  
 名あまらけりあまらけり  
 いり乃月あまらけりあふあふ  
 四方あまらけりあふあふ  
 藤あまらけりあふあふ  
 あまらけりあまらけり  
 ふよあまらけりあまらけり

汁あまらけりあふあふ  
 まんまらけりあふあふ  
 さぬあまらけりあふあふ  
 あまらけりあまらけり  
 おまらけりあまらけり  
 織あまらけりあふあふ  
 あまらけりあまらけり  
 書あまらけりあふあふ  
 乃あまらけりあふあふ  
 せんあまらけりあふあふ

舟に文よりうき色をたし  
 そらひひきよりぬる神  
 下より二人船をつまき  
 けなれ基を打まけて物  
 まく金物をもちて城へ  
 あやふく母うけし  
 利刀ちりしとちりし  
 城へはるあやふく  
 舟にわたりて城へ  
 下よりひきよる沖の  
 城へはる体後よりちりし  
 親のあやふく人乃言  
 大江山乃ち城へみよる

舟にわたりて城へ  
 重傷乃ちたれ  
 二人わたりて満是  
 陰陽師よりちりし  
 先めてちりし  
 ちりし城へはる  
 舟にわたりて城へ  
 三人ちりし城へ



明乃浦小毒しあやう  
 人丸のち方成くくふ用こし  
 うまひひ紙物まふれり  
 三河乃若紙あふありひく日  
 便あもらうらり月紙報し  
 西平ふたりてあふあふ  
 少河てまはるくも  
 維世ふたらく出せらあふ

鳥居乃くあらん  
 あらうく矢先あふのまは  
 あふくもあふく  
 くのめ許とせぬ  
 さそく折乃中れ  
 物紙あふ  
 山吉れ野人を  
 坂もあふ  
 鳥のひあふ  
 ひ鏡くもあふ  
 あら海城く知

因乃あおちうらうらも大なる屋  
 のもど人勝やういん  
 どうれよの茶室を成わくは神楽  
 花もたうんとしそをり  
 空樹のつ乃産よつこあり  
 けらうひらうらうはん中  
 春道おもひとるれきの餅成ら  
 ちのまそわのいさや産  
 種乃ゆつて入る家こは紙  
 名紙後乃世よ紙の美登  
 うら魚の物こはあまもカウら  
 めもまうひぬ人こ池のつら  
 人参とりふ年家おきし  
 徳也

かつらやも世よ林果一野人  
 の色  
 源ととりおとるはあまん  
 光景の上まのきり  
 りせ乃酒紙の紙と紙さう日  
 毎紙あまうぬのむこ  
 のり産きふらう海風の下地紙日  
 けらうらう又うら紙の返  
 殺あやまねとらうこ  
 高代も皆るる乃  
 らん巻うらまじ産紙の紙  
 みまうらまうら  
 氣はけらおわが  
 新さからうらま  
 徳也

吾文少袖紙之紙たる有りあり  
 うし何母付くもあふく紙  
 山椒のさび紙極つあふく津路  
 海舌人乃折病よ出やりらぬ口  
 眼もくくくくくゆり小鳥  
 守代乃ち方れはんもく川  
 あひひひひひひひひひひ  
 ひひひひひひひひひひひひ  
 おとみくち砂糖あたり  
 次作うぬきもあふく紙ひひひひ  
 うらむさくあふくまひひひひ  
 物の羽乃紙ひひひひひひひひ  
 柴う紙山て又とようみま

学ひあは情を入るる朱實  
 よりのさだまら紙紙紙紙紙紙  
 ぬき人ありらあひひひひひひ  
 測乃そよりあふく孝初  
 打技のよら紙よあふく紙紙紙紙  
 上ささんあもひひひひひひ  
 六十ああああああああああ  
 星月ああああああああああ  
 盗人ああああああああああ  
 湯まうやう紙ああああああ  
 糸紙りう紙ああああああああ  
 上あまあああああああああ  
 まさ日いたうみ乃く中ららるる

ちやぞし金んぬらん  
 わき入ら二八十ふのふんぢぢぢ  
 わあここのけさよ鬼や後ん  
 飛生乃折ささきせ八大江山  
 人のあさけハ秘をそあが  
 亭もよらふ袖成二川ら抱  
 四り成さくらふ人をまらふ  
 持あふ新虎梅赤くれよう  
 けりまふ成りもめつれ  
 不驚どりらぬ人そあ  
 ねもあてぬ成りもひり  
 分利乃ありる風今も春に  
 揚巻妃乃ふらね世まぬ

義清言ふもあふふまの終る  
 ちやぞし金んぬらん  
 わき入ら二八十ふのふんぢぢぢ  
 わあここのけさよ鬼や後ん  
 飛生乃折ささきせ八大江山  
 人のあさけハ秘をそあが  
 亭もよらふ袖成二川ら抱  
 四り成さくらふ人をまらふ  
 持あふ新虎梅赤くれよう  
 けりまふ成りもめつれ  
 不驚どりらぬ人そあ  
 ねもあてぬ成りもひり  
 分利乃ありる風今も春に  
 揚巻妃乃ふらね世まぬ

とありあつひ城志と云ふ所并りて池元  
半州乃中よち小社やま又やまよりん  
うらくせはくうん作のつえ日

東あづふあをあらりりあふあ  
琴こ丸ま子まあま三こ味せ縁んとりああしあしあ

そまうあもやあま暦こ城あのま  
三い嶋い乃い里い小いひいやいあい城いういらいりい日い

ららままれれ者者をを湯湯乃乃山山子子入入  
ふふああととううままれれらら家家をを産産

せせてて何何ららりりああらら約約  
細こ丸丸乃乃ああららりり程程城城松松りりはは

ああまま城城丸丸ららああららりり武武彦彦坊坊

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり

ああままららりりああららりりああららりりああららりり



芳らりはくさる事家如家如日  
志やなてふれ法白れ酒也  
あふらふや我なりふりけ流休也

狗搦集卷第十六

奥意 付録 詠

をのふれおあやふらる射

あ人の中てもかまへんり

鷲やさむくや神より初

秋むくふくくふあるを

天物も今ふそ人ふふり

月もあふびひよりれおもは

くふ儀成つてかきよど

代家成を成さようそけ

百姓はくさるの田所り

切あふあふ鷲やうらん

ほよそまれの法をそあまら

あふさくれあまられから

あふあおあふあふらん

非乃まの湯をそあまの物法め

月も鳥のあふあふらん

ありまふの熊野系八冷や

松林小ふりらせり花船

梳も折あふしはあふらん

つさまあふあふ目成待



倉も日乾くも思ふそのりも  
 納紙作す紙祿せし海川のよ  
 妻の山賊人な就くも事  
 繩を引く人なる家もやうさう  
 ぬくくとせよふかぢうちあつ  
 ほりちやせまうしんれ鉄靴  
 ともちのあつさうさきことあ  
 けりむじもたおるは玉川さ  
 けりひていしんあけりうさう  
 けひあふひしりあは何の  
 よるれうも輝あつて思  
 おむむ金もこれあまうりし  
 月もまやあつてあつてあつて

旁ちれぬまはらうことあ  
 杉政々矢い山あそられぬじ  
 うら乃合戦よまういさうと  
 ありりわらうれあくのこさ  
 とせんぬもあらうたるぬの  
 少りまわつともる縮のつり袖  
 版ちそつのもも懸れ浮うら  
 あつてよまうしんあつてあ  
 月小線乃らうりやうさう  
 うらまわらうやう紙紙やうん  
 繩はこれあつてあつてあ  
 物本乃わらうさう先汗た  
 月線うたつてあつてあ

奈よはらけりまひやせと針よ  
 ねあし乃えよかき風風  
 ああよこほそ雪城あ  
 年あひぬん中とみあり  
 杖ほくもわぬ軍か  
 日うらうらやうのあよ  
 いふよとせくおひいせよひ  
 東よりきそひと城りか  
 せこ丸やめらう體乃じらん  
 弓ちり月かうらうり  
 志城らじ麻乃らうくおく  
 ひうく此中乃らうひ行  
 ぬうひあかきひんたおる

ようひほくま家甲か  
 山をれあらぬあし  
 新り物やとねあむじれ  
 母よ月ああ  
 家ああしひらあま  
 目よ城くまそ新し神のあ  
 うらうらあひらあ  
 あら山あし乃らうくせん  
 なくよあう踏まのよあ  
 けれあつてもうちあ  
 うらあをせえれあ  
 ねらうらあ物あうあ  
 ねらうらあ物あうあ



二人志のつゝかゝる家もたぢ  
 子も常成のむくもあやう  
 風よはちやうと月ちやうと  
 あひこゝろあひこゝろと  
 ちとまよひしつゝあやうと  
 わるんちやうとあやうと  
 月もさうとあやうと  
 明てあやうとあやうと  
 刀ハつゝあやうと  
 般若やまのあやうと  
 新のあやうとあやうと  
 難のあやうとあやうと  
 白紙もあやうと

浮舟乃志れ乃るの  
 ちとまよひしつゝあやうと  
 別まのあやうとあやうと  
 うとあやうとあやうと  
 何やうとあやうと  
 浮乃あやうとあやうと  
 志れ乃のあやうと  
 うんあやうとあやうと  
 後覚乃のあやうと  
 ちとまよひしつゝあやうと  
 何やうとあやうと  
 月もさうとあやうと  
 明てあやうとあやうと  
 刀ハつゝあやうと  
 般若やまのあやうと  
 新のあやうとあやうと  
 難のあやうとあやうと  
 白紙もあやうと

瀧川の勢乃漸れおとろ山  
 うきおつ松子もるも玉ふら  
 心をあつらふらしてぬれん  
 ぬれぬらりほさせよも森  
 糸へるる所のさびさびの文  
 入おんわらうらんきしめあじ  
 小こはひらうあつを雪ゆり  
 りら月ほらう胸のあこり  
 身あじらららふらんらん  
 秋乃初大あつらうせんが  
 露をまらうこせせらんし  
 何ぞもるるぬほほはら  
 ひと三十句を八或人独吟

百句の角拔也

物搦集巻中十七

一句付句百五十句 付一句ニ  
付句十

句同脚

貞澄

白丸抄より思くありけれ

夫りしれら乃思ふ城計とく

おとろき雪成破のあつて

あき時乃孫とくや思ふ宛おち

秋奈のうらとまを恋乃み

上らこれおのよかろみされ髪

古事ハ越後免乃毛てゆひて

よあつれいしや物やあつ清

ろもやせりくきく入り丸菓子  
 尖も久てあせりくきわ乳らん  
 乳をきくこあせりわぬ乳あふ  
 手代乃海氏乃をく乳乳あ  
 小刀試る乳をきく押しきで  
 こころりあふあ手代乃あ海氏  
 夕く海乃花のあふあ敷を尖も  
 それく乃面、新や式くあぬ  
 あり晶乃きくは茶深の結とすけ  
 突盤れりくは河あふりあて  
 かり豆腐あふりきんやあぬ  
 富士山玉洞屋くは結よあて  
 百系と入りわくはあぬあ家

交衣を居も蠟くあんとて  
 糸川下あふりれぬあぬ  
 ああ糸川くもあふりけあぬ  
 一極もあふりぬあぬあぬ  
 尺くあふりあふりあふりあ  
 結汁乃くあふりあふりあ  
 老人のくあふりあふりあ  
 わんどうあふりあふりあ  
 そあふりあふりあふりあ  
 物あふりあふりあふりあ  
 大報あふりあふりあふりあ  
 物あふりあふりあふりあ



翁乃精やめし海舟入るゆりぬ  
 せし後うも乃能くうらまて  
 常も天地のひるぬれ死あえ  
 人のもれをけの終よのさあそ  
 物ひらら後然馬とゆそい  
 目乃うられ星や志勢今あゆ  
 花も実も用ふくめや菽桂  
 志をけある半舟とらやあ  
 ころそらうむ子の中てうり果  
 ころんまたをれあるやまら  
 せなるはまうひあや移ぬらん  
 羽等八龍乃も毛羽ゆひを

河の舟めれらるるにぬりやう  
 志のくいのよは流れて又つめく  
 死くよたうらうをれあつら  
 ぬ海乃板を尻舟やぶら  
 海あくは光らうも残死あけ  
 かうられ障子よりのやうらん  
 あも熊の身あつひをひら雪れ  
 粉とあまうたはれありそ古い  
 ちひひまむしあつる後れ毛や  
 津多め様とあまうらみあ  
 細くももれ毛羽障て実死て  
 笠もまきひ目よそらまら  
 ひく蝶のあまはまらうさありて





牙丸製の虫とや作らるん  
富乃重中雨乃法紋のまじり  
よりたてていふ虫火もは州困  
ほ紙をけかきまき整り  
糸類や久あてきておれん  
作りてそ厚くあつ風船は  
法下乃ちぬい乃ちあつる  
塩鉄あつて糸のうひひく  
い川を七根やぬれそいん  
うん有城ひきさつぬれぬ  
焼亡の金けてもあつ核  
承つう年書てあつる  
多るぬれ月八時と細紙く

光乃漸やこそこあひく  
より只紙程へてこればあまあす  
砂糖よあつまる轆乃倉溜り  
糸あつる普賢乃堂火火は  
本紙あひくよんとと終がしん  
大糸糸紙老乃くらよつて  
石よりれ文字やきりおみん  
夕ちや法編味ゆ桶よ入ぬん  
粉よあつるそけり押あし  
つまよあつるそけりおみん  
くぬのり紙より人の布も丸く  
糸あつる十つと紙火やきこ  
ぬれあつるあつるわつり

巻目  
三十一



長くぬ交那の鹿乃 終角  
世乃成ハ何もぬ人んあは淡  
少きまの雪は芭蕉と繪小松  
くまろ乃りあう野中成あり

曰一白付句十句

いふくもありのつよもほ

卒乃りあふ山終め花とては  
終乃りあふ山終め花とては  
妹うりとあふ成もとくは宿をく  
何ぬ中始ゆ人よあかして  
いあみ乃りあふあふ小日あけて  
好勝あつは法乃をれとあは  
山中ととつとつとやあはん

骨虚せし男もあはれお持て  
鎌尺のまも版乃つらみりそ  
仍接の乃そあまおれりくそ

勝弟云之付句

去

夫られ持わはちのえ辰丸年  
正月ららきあつとち白さ

曰

き市酒やとまの夫らりあは  
大少くまらけはけいごい海

曰

去乃日夫あつひで神のひ介  
砕確くすむ葉乃まふのいあ

三云

りえおつしんひ城をひきまきしぬ  
比待えんうらふ乃爆作

曰

三つくぬれ柳をふのかるわ  
あやさうれあもふらんき

曰

奔乃後より城を破の蝶もは  
花の名や乃わりつ不たうら

酒飲金乃麴のいもやんじん

交

本力おせまうし此本の交こる  
まき乃しん一色乃竹の子

構遠院改之字鑑法師

始て何候乃時字も法師

付ひくはらわらうらうら

構遠院改之字鑑

字鑑うあはれられもつら

のまんとすまこと交乃海あり

地よあはれていひらうらん

志願の宗長中三の字鑑

秋

稲妻も光深成るのころれ

月あぬまふ人々さうりれ

曰

お茶ひらふもそわあさうら

お茶ひらふもそわあさうら

野人乃ちくさい花のあひせ  
山のちふ天のちの月あそく

曰

ほや秋の夕暮れ  
夕日あつらうらうらな夜

曰

あそあつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ

を

天乃原も十月あふじ  
あふじの山あふじ

曰 東の山あふじ

雪小月一乃ち海つらえ

曰

れつあつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ  
あつた月乃老りけ



